

パレオ・インディオとアメリカ大陸最古の土器文化¹

ロベルト・ルナゴメス・レイイエス*

南 智博 (訳)**

最初のアメリカ人はホモ・サピエンスすなわち現生人類であるため、アメリカ大陸は人類が第2段階にて進出した大陸と考えられている。しかし、その民族系統についてはまだ研究者間での見解が一致していない。もともとは3万年以上前の更新世の間に、ベーリンジアの陸橋を渡ってアラスカの北西部にやってきたモンゴロイドだと言われていた。その後、コーカソイド系の東ヨーロッパ起源の人々であったとされ、近年では、人間が大西洋と太平洋を通過してアメリカ大陸の南部の海岸へ到達することが出来たとも提唱されている。

アメリカ大陸における人間活動の最古の証拠は、尖頭器(せんとうぎ)と呼ばれる石製の遺物である。それらは火打ち石、フリント、黒曜石、玉髄といった様々な石を原料として複雑な技術で製作された両面を加工した石器である。これらの石器は狩猟に用いられたためにバイソンなどの動物遺存体と共伴する。また、それらは打撃による剥離と押圧剥離、石刃、特に中央にへこみのある槌状剥離(ひじょうはくり)などの特徴を有する。そのような石器はクローヴィス伝統(紀元前1万2500~1万年前)に属する有名な尖頭器として知られ、フォルサム、サンディア、ユマ、ラ・ホヤ、ラボックなど地域的バリエーションがある。もともとは米国南西部のニューメキシコ、アリゾナ、カリフォルニア、テキサス諸州の様々な遺跡で見つかったが、今日では北は北米大陸のアラスカ、南は南米大陸のコロンビアに至る広大な範囲で分布していた証拠が見ついている (Ames & Maschner 1999; Fiedel

1996; Lekson 2009)。

尖頭器、つまりクローヴィス伝統の革新的な発明は、アメリカ大陸における人類の著しい技術発展であった。バイソン、鹿、馬、ラクダ科動物、カリブーといった大型動物の狩猟だけでなく、野ウサギなどの小動物を狩るのにも用いられ、更新世から完新世への移行期における非常に激しい環境変化の中で何世代にも亘って日々の食料を補うのに役に立ったのであった。

一方、アラスカ、ペンシルヴェニア、ヴァージニアといった北米大陸の他の地域では別の石器文化が見つかっており、木葉形尖頭器、溝のある槌状剥離を伴う両面加工の石刃、スクレイパーなどに特徴付けられる。それらはカスケード尖頭器、メドウクロフト岩陰尖頭器、カクタス・ヒル尖頭器と名付けられ、クロー



図1 クローヴィスの尖頭器 (Fiedel (1996) より抜粋)

* Universidad Veracruzana - México (メキシコ・ベラクルサーナ大学)

** 南山大学大学院

¹ Roberto Lunagómez Reyes, *El Paleindio y los primeros complejos cerámicos americanos*.

ヴィスと同等に古く複雑な技術を示している (Lankford 2006)。

同様に、古人骨にも最初のアメリカ人の系統の多様性が認められる。それはメキシコ、米国、南米の特にブラジル共和国のアマゾン地帯のルジア遺跡などで発見された人骨で顕著に見られる。

一方、南米では魚尾形 (ぎょびけい、ぎょびがた) と呼ばれる初期の石器文化が見つまっている。それはクローヴィスの技術的特徴、すなわち中央の槌状剥離を伴う両面加工石器であるが、少し違いがあり、柄つまり基部が魚の尾に似た形に加工されている。そのため魚尾形と命名されたのである (Bate 1982)。この魚尾形石器文化はパタゴニアのモンテ・ベルデ遺跡、ロス・トルドス遺跡、ラス・マノス洞窟などの古い遺跡 (Scheinsohn, Szumik & Rizzo 2009)、アマゾンのモンテ・アレグレ遺跡やペドラ・フラダ遺跡で見つまっている (Roosevelt *et al.* 1996)。このことは魚尾形石器文化がクローヴィス文化と同じくらい古い、あるいはそれ以前に遡る可能性を示している。

中米地域も例外ではなくクローヴィスに匹敵する早期の石器文化が発見されており、特にメキシコの北部、中部、南部、グアテマラ、ベリーズなどで顕著である。メキシコ国立自治大学のギジェルモ・アコスタによるチアパス高地での最近の研究や、アルデレアン等によるサカテカス高地のチキウイテ洞窟の調査から

(Ardelean *et al.* 2020)、最終氷期のメキシコ領域における人類の古さが問題となっている。

これら全ての調査では、中米は数千年の間、初期の人間集団の交流が行われていた地域であり、人々が生き延びるために採集、狩猟、漁労のよりよい状況を模索していたことが示唆されている。それ故に、我々は最初のアメリカ人はどのような人たちであったかについて確かなことは分からない。しかし、彼らは人間の家族集団ないし部族であり、時に温和ではなかった環境条件下でも生き延びるのに成功したことは分かっている。食料の獲得には多くの失敗を重ねて、熱帯や森林での果実の採集、古期における園芸といったことに成功し、それらによって生存が可能となったのであった。

それから数世代も後に、アメリカの人々は人類史の大きな発明品の1つとして考えられる粘土を焼くという技術、つまり土器の発明という技術革新を成した。その頃、中東 (メソポタミア、エジプト、インダス川流域)、ヨーロッパ、ロシア東部、モンゴル、トルコ、極東 (中国、韓国、日本) といった世界の他の地域では既に土器製作が始まっていた。

一方、ペルー中央海岸に流れるスーペ川の渓谷に飛び地のように位置するカルルと呼ばれる場所には4千年以上も前に、別の技術進歩と社会政治的複雑性の特徴が発展した並外れた遺跡が存在する。その特徴として例えば、広場に配置された記念碑的建造物、都市的設計、カルル内での階層制のある遺跡分布モデルといったものが挙げられる。それほど社会発展にも関わらず、シャディー等の近年の調査によると、家庭内労働あるいは儀礼活動ではかご製品の使用が認められるものの、灌漑を伴う農作業に際しては土器を必要としなかったというのである (Shady *et al.* 2001)。疑いなく、カルルはアメリカ考古学の中でも傑出した遺跡である。

エクアドルの海岸ではアメリカ最古の土器文化の1つバルディビア文化が現れた。それは人形土偶、鍋、テコマテ (無頸壺)、碗や鉢のような広口土器を特徴とする。ベティー・メガーズなどの専門家たちは、バルディビア土器と日本の有名な縄文土器との間には文化的な結びつきを想定した (Meggers 1966)。しかしバルディビアではそれよりも古いサン・ペドロと呼ばれる相が見つかったため、南米早期のこの土器文化が縄文土器に由来するという仮説は否定された。

タペリアとモンテ・アレグレの両遺跡についても述

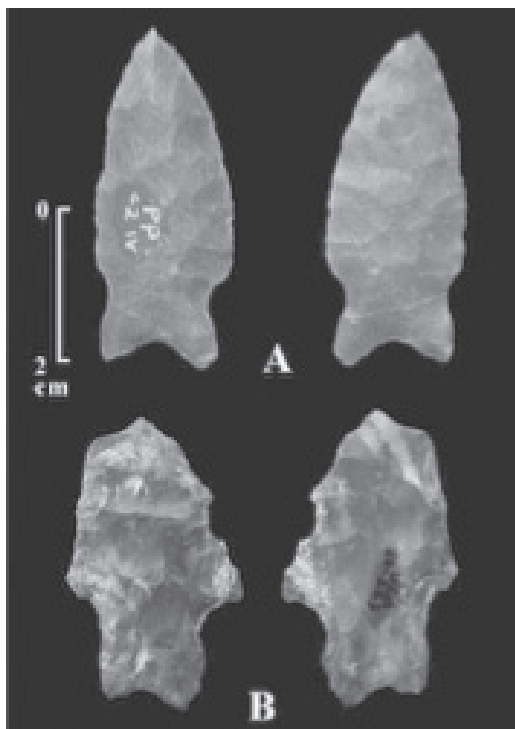


図2 魚尾形尖頭器 (Suárez & Santos (2010) より抜粋)

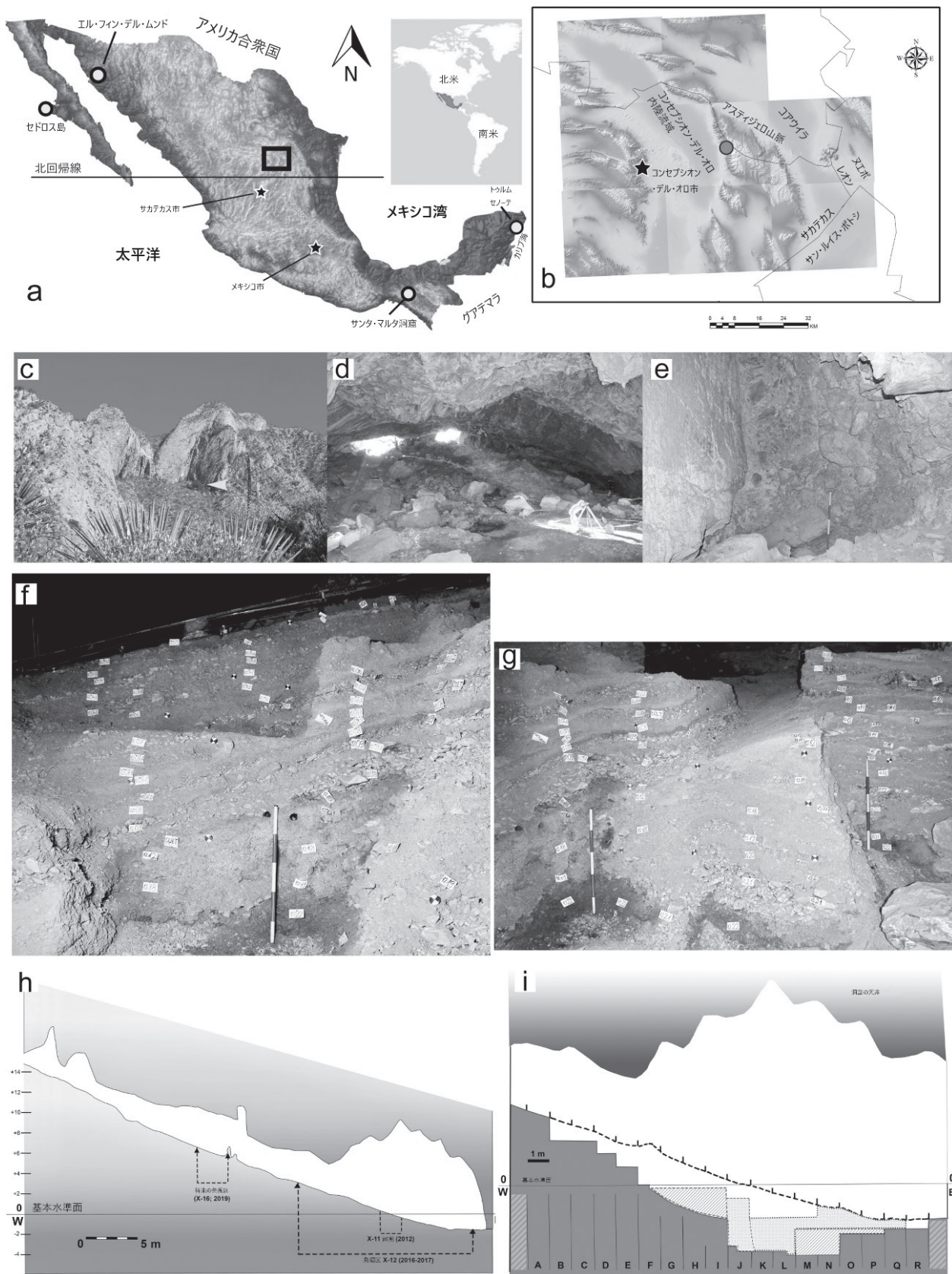


図3 チキウィテ洞窟 (Ardelean *et al.* (2020) より抜粋)

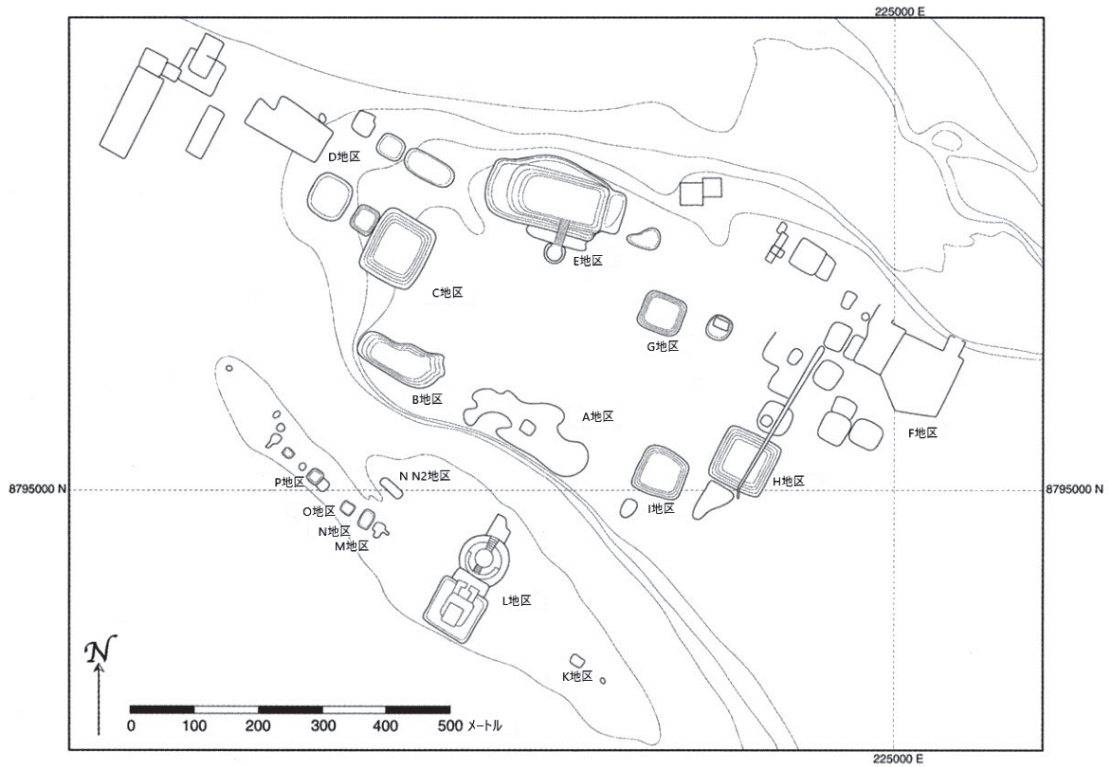
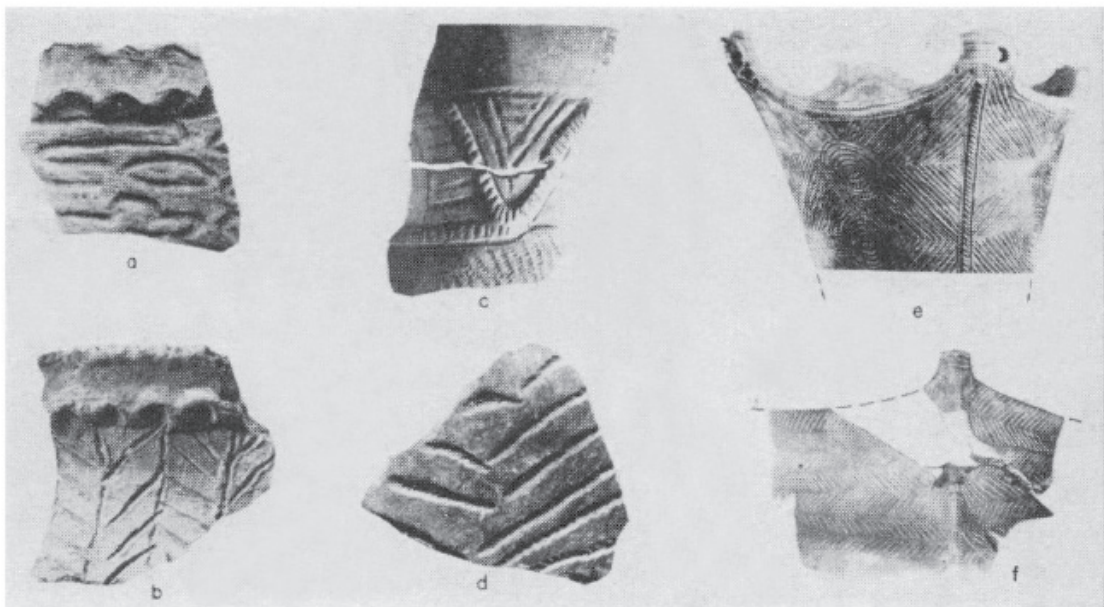


図4 カラル遺跡の地図 (Shady *et al.* (2001) より抜粋)



縄文 (a, c, e) と早期バルディビア (b, d, f) 土器の器形と装飾の類似性の例。a-b、折り返しと指圧による縁、c-d、「組みひも」の押印、e-f、凹凸のある口縁部とジグザグに配置された彫り込み線。出土地:a、いわさけ式、九州、縄文中期(2); c、勝坂式、本州、縄文中期(3); e、堀之内貝塚、千葉、縄文後期(4); b, d, f、バルディビア遺跡、グアヤス地方、エクアドル。

図5 縄文とバルディビアの土器タイプ (Meggers (1966) より抜粋)

べておかなければならない。アンナ・ルーズベルトのチームが調査を行ったブラジル・アマゾンの遺跡であり、その出土遺物の試料から加速器質量分析により現在から7千年前以上も前の年代測定値が得られている。他の早期の土器文化が認められた遺跡と同様に、その土器は複雑な器面装飾、テコマテや鍋のような口が閉じた器形に特徴付けられる。それらはおそらく家庭内で、あるいは儀式の際に液体を保管して輸送するために使われたようである (Roosevelt *et al.* 1996)。

テコマテの口が狭い器形は、おそらく液体の輸送のためにカボチャの形状を特に模倣した結果であり、その製作はアメリカ大陸各所で見られた早期の真の革新的出来事であった。テコマテや長頸の深鍋は、サバンナ川に位置するスターリングス島遺跡、ボヴァティ・ポイント遺跡といった米国東部からアマゾンに広がる初期の土器文化で最も使われた特徴的な器形であり、その器形が広まって、長期間に亘る真の土器伝統となった (Bletter & Daly 2006)。

一方、中米地域でもホンジュラスのプラヤ・デ・ロス・ムエルトス遺跡、コロンビアのプエルト・オル

ミーガ遺跡、バルロベント遺跡、そしてパナマ地峡のモナグリージョ遺跡に初期の土器文化が現れた。両地域では器面の細かな装飾の施された様々な器形の土器文化が出現している。

もちろんメソアメリカ、古代メキシコも例外ではなく早期の土器文化が認められる。西部ではコリマ州のカパチャ文化、ゲレーロ州海岸部のボックス土器 (Brush 1965)、中央高地ではソアピルコ=トラパコヤ湖岸のトラティルコ文化、オアハカ中央盆地のエスピリディオン相、隣のテワカン谷のpron相、チアパス州太平洋沿岸部のソコヌスコ地域、グアテマラのバラ相やオコス相、メキシコ湾沿岸南部のオホチ相、バヒオ相、またマヤ地域のコトーラ相、マモン相といったものがある (Porter Weaver 1981)。

古代メキシコにおいて、土器の出現は必ずしも本格的な農業と結びついていたわけではない。しかしメソアメリカのトウモロコシ (*Zea Mays*) については、発酵したトウモロコシとカカオを原料とした飲み物であるポソルが土器に入れられて飲まれていた証拠があり、ポソルは今日でもメキシコ南東部で飲まれている



図6 アメリカ大陸最古の土器文化 (Weaver (1981) より抜粋)

(Cyphers *et al.* 2013; Lunagómez 2012)。

液体を入れる土器の製作の例として、3500年以上も前に、液体を調理し運ぶための鍋やテコマテといった単純な形の土器を製作していたオルメカ文化の人々を挙げることができる。彼らはその上、亀や甲殻類を獲るための網を編み、木製のカヌーやその他の道具を作った。これらを用いて川の増水により劇的に変わりうる環境、つまり日常生活の平穏から突如、災害に見舞われるような状況にも対応したのだった (Symonds *et al.* 2002; Lunagómez 2017)。

重要なことを強調しておきたいが、アメリカ大陸最古の土器文化の出現は内陸の湖や海岸部で生じたため、土器の技術革新は世界の他地域のように定住農耕社会とは結びつかなかった。もし有名なオーストラリア人考古学者ゴードン・チャイルドが提案したように (Childe 1986)、土器の出現が古代文明の1つの条件であるならば、アメリカ大陸初期の文化においてはこの一次的社会政治的発展の条件は達成されているとはいえない。最古のアメリカ人、すなわちパレオ・インディオが何世代にも亘って成功と失敗を繰り返し、クロヴィス文化や魚尾形石器文化という最古の石器文化を生み出したことは特筆すべきことであった。そして最初の土器文化を作り出した人々も同様に、幾度とない成功と失敗を乗り越えて、土器の製作を達成したのである。それが生業の強化の基盤となり、長い時間を経た後に、オルメカ、マヤ、テオティワカン、メシーカなどのメソアメリカの諸文明、ティワナク、インカ、チムーなどの南米のアメリカの初期文明を形成するに至った。

参考文献

- Ames, Kenneth M. & Herbert D. G. Maschner
1999 *Peoples of the Northwest Coast*. London: Thames and Hudson. (ケネス・M・エイムス、ハーバート・D・G・マシュナー 2016 [1999] 『複雑採集狩猟民とはなにか——アメリカ北西海岸の先史考古学』(佐々木憲一監訳、設楽博己訳)、雄山閣)
- Araujo, A. G. M. & Correa, L.
2016 First notice of a Paleoindian site in central São Paulo State, Brazil: Bastos site, Dourado county. *Palaeoindian Archaeology* 1(1): 4–14.
- Ardelean, Ciprian F. *et al.*
2020 Evidence of human occupation in Mexico around the Last Glacial Maximum. *Nature* 584: 87–92. Accessed March 15, 2021 <https://doi.org/10.1038/s41586-020-2509-0>
- Bate, Luis Felipe
1982 *Sobre el Poblamiento Temprano de Sudamérica*. México: Actas del X Congreso de la Unión Internacional de Ciencias Prehistóricas y Protohistóricas.
- Bletter, Nathaniel & Douglas C. Daly
2006 Cacao and Its Relatives in South America: An Overview of Taxonomy, Ecology, Biogeography, Chemistry, and Ethnobotany. In *Chocolate in Mesoamerica: A Cultural History of Cacao*. C. L. McNeil (ed.), pp. 31–68. Gainesville: University Press of Florida.
- Brush, Charles F.
1965 Pox Pottery: Earliest Identified Mexican Ceramic. *Science* 149(3680): 194–195.
- Childe, Gordon Vere
1986 *Los orígenes de la Civilización*. México: FCE. (G・チャイルド 1957 [1936] 『文明の起源 (上・下) [改訂版]』(ねずまさし訳)、岩波書店)
- Cyphers, Ann, Judith Zurita Noguera & Marcie Lane
2013 *Retos y riesgos en la vida olmeca*. México: Instituto de Investigaciones Antropológicas, UNAM.
- Fiedel, Stuart J.
1996 *Prehistoria de América*. Barcelona: Editorial Crítica.
- Lankford, George E.
2004 Some Southwestern Influences in the Southeastern Ceremonial Complex. *The Arkansas Archaeologist* 45: 1–25.
- Lekson, Stephen H.
2009 *A History of the Ancient Southwest*. Santa Fe: School for Advanced Research Press.
- Lunagómez Reyes, Roberto
2012 Los Olmeca: sus predecesores y sucesores. In *La Costa del Golfo: de los olmecas al Tajín*. Ladrón de Guevara, Sara (ed.), p. 248. Roma: Jaca Book editores.
2017 El surgimiento de la civilización mesoamericana: los Olmeca. *Perspectivas Latinoamericanas* 14: 164–179.
- Meggers, Betty J.
1966 *Ecuador* (Ancient people and Places 49). London: Praeger. New York: Thames & Hudson.
- Porter Weaver, Muriel
1981 *The Aztecs, Maya, and Their Predecessors: Archaeology of Mesoamerica*. New York: Academic Press Inc.
- Roosevelt, Anna C. *et al.*
1996 Paleoindian Cave Dwellers in the Amazon: The Peopling of the Americas. *Science* 272(5260): 373–384.
- Shady Solis, Ruth, Jonathan Haas & Winifred Creamer
2001 Dating Caral, a Preceramic Site in the Supe Valley on the Central Coast of Peru. *Science* 292(5517): 723–726.
- Scheinsohn, Vivian, Claudia Szumik, Sabrina Leonardt & Florencia Rizzo
2009 Distribución espacial del arte rupestre en el bosque y

la estepa del norte de Patagonia. Nuevos resultados. In *Arqueología de Patagonia: una mirada desde el último confín, Tomo 1*. M. Salemme, F. Santiago, M. Alvarez, E. Piana, M. Vázquez, & E. Mansur (eds.), pp. 541–558. Ushuaia: Editorial Utopías.

Suárez, Rafael & Guaciara M. Santos

- 2010 Cazadores-recolectores tempranos, supervivencia de fauna del Pleistoceno (*Equus Sp.* Y *Glyptodon Sp.*) y

tecnología lítica durante el Holoceno temprano en la frontera Uruguay-Brasil, *Revista de Arqueología* (Sociedade de Arqueologia Brasileira) 23(2): 20–40.

Symonds, Stacey, Ann Cyphers & Roberto Lunagómez

- 2002 *Asentamiento Prehispánico en San Lorenzo Tenochtitlán* (Serie San Lorenzo 2). México: UNAM, Instituto de Investigaciones Antropológicas y Dirección General de Asuntos del Personal Académico.